

■特集 浦西和彦の仕事

浦西和彦編 『徳永直全集』の目次案

和田 崇

まえがき

私が関西大学千里山キャンパスにあった浦西和彦先生の研究室を訪ねたのは、二〇一一年春のことであり、あれからもう八年が経つ。そのとき私は、ある要件を浦西先生にお引き受けいただくため、依頼に参った。関西大学文学部の研究棟の外観は、築年数の浅いほかの建物と同化させるように外壁が整備され小ざれいである一方、その中は古い木造建築を思わせるような趣のある雰囲気であった。緊張をしながら研究室に入ると、入口に対して垂直方向に書棚が所狭しと並べられており、その書架の迷路を抜けると、浦西先生がいらっしやった。そのとき、浦西先生は大学院生を指導なさっている最中であったため、私が口早に要件を告げると、ご本人の意思とは関係なく、先生はその要件を満たす資格をお持ちでなかったために断られた。私は

がっかりとうなだれるしかなかった。

しかし、浦西先生はそんな私に次のような言葉をかけてくださった。徳永直を研究していたね。あそこに徳永直全集を編纂していたときの資料がある。段ボール二箱ぐらいかな。処分に困っているから必要ならあげるけど、どうするかい。浦西先生が本当に処置に困っていらっしやったのか、それとも、落胆する私を励ます意図があったのかは定かでない。いずれにせよ、私は即答でぜひいただきたい旨をお伝えした。その後も浦西先生はきちんと約束を覚えておいてくださり、ご退職前に徳永直全集の編纂資料を送ってくださいました。

本稿で紹介するのは、その資料集の中に含まれていた一部であり、幻に終わった浦西和彦編『徳永直全集』全十五巻の目次案である。資料の中には、故・祖父江昭二氏から送られた徳永直書誌の逸文の指摘や、図書館からのレファレンス回答の書簡

等も含まれており、書誌研究の鬼である浦西先生が文献収集をされた過程も垣間見られて興味深い。

資料の形態については、A4コピー用紙二十八枚の活字印刷で、誤入力が目立つことから、出版社が浦西先生の指示にもとづいてワード等のワープロアプリで入力したものと推定できる。また、本稿では十五巻立ての目次案を掲載するが、それとは別に十二巻立ての目次案も存在し、こちらはA4コピー用紙七枚の活字印刷で、エクセル等の表計算アプリで入力されている。作成年代は、以前浦西先生にお伺いした話や、断片的に残された文献探索の痕跡などから、二〇〇〇年代初頭とみられる。一部の巻では作品名の下に初出誌の情報や原稿用紙換算枚数が記されており、編集に際しては発表された年代や文字数に配慮した形跡がある。ただし、これらの注記は全巻で徹底されていないため、本稿では省略することにした。

目次を掲載する前に、徳永直の書誌と全集にまつわることを少しだけ説明しておきたい。

まず、書誌について、浦西和彦「徳永直著作目録」(『国文学』関西大学国文学会、四八号、一九七三年)で先鞭が付けられ、林真「徳永直の逸文」(『日本古書通信』一九八一年二月号)などによる指摘を踏まえて、浦西和彦編『人物書誌大系1 徳永直』(日外アソシエーツ、一九八二年)が編まれた。その後、浦西先生は「徳永直(人物書誌大系1)」の「こと」(『書誌索引展望』七巻二号、一九八三年)で同書の遺漏を若干補足している。最新版の書誌については、

拙稿「徳永直の創作と理論—プロレタリア文学における労働者作家の大衆性—」(博士論文、二〇一三年)に付録として掲載したが、一般には参照しづらい状況であることをお詫びしなければならぬ。つまり、三十七年前に浦西先生が編まれた『人物書誌大系1 徳永直』は、いまだに徳永の書誌探索ツールとして重宝されているのである。

次に、全集について、日本における徳永直選集は、最も長いもので二巻本であり、新日本出版社が一九八七年に刊行した『日本プロレタリア文学集・24 徳永直集(一)』および『日本プロレタリア文学集・25 徳永直集(二)』と、徳永直の会が中心となつて編集し熊本出版文化会館が刊行した『徳永直文学選集』(二〇〇八年)および『徳永直文学選集II』(二〇〇九年)の二種類が存在する。「日本における」とわざわざ述べたのは、中国で李芒の翻訳により、人民文学出版社から全四巻の『徳永直選集』(一九五九年〜六〇年)が出版されているからである。つまり、選集の巻数だけで判断をすれば、徳永直の作品は母国であるはずの日本において冷遇されてきたと言える。

こうした徳永直をめぐる状況に異を唱えたのが中野重治であった。中野は「徳永直選集の件」(『文藝』一九六九年一月号)で徳永の没後滿十年が経過した頃に徳永直選集を刊行する必要性をいち早く訴え、その後も「あれこれの思い——宮本百合子死後十周年——」(『アカハタ』一九六一年一月二日)や「緊急順不同2」徳永直全集、選集、また著作集を急ぐこと(『新日本文学』

一九七四年二月号)で、繰り返し全集ないし選集の刊行を催促した。ちなみに、「徳永直全集、選集、また著作集を急ぐこと」の冒頭で、「岡山の方のある人」から雑誌『作家クラブ』第一号に掲載された伊藤永之介と前田河広一郎の文章の標題を教えしてほしいとの問い合わせがあったと書かれており、この「岡山の方のある人」こそ浦西先生である。このことは、浦西和彦「四方の眺め」徳永直全集のこと」『梨の花通信』五〇号、二〇〇五年で明らかにされている。

さて、最後に、中野の文章の中からいくつかを引用し、徳永直全集を刊行する意義を改めて訴えておきたい(*引用はいずれも『第二次 中野重治全集第二十四巻』(筑摩書房、一九七七年)による)。

徳永の死んだすぐあと、全集とか選集とかいうものが考えられたことはあった。私も考えた一人だったが、その私のところへ、ある日橋本英吉から手紙が来た。徳永の著作集、全集といった計画があるだろうが、計画実現のためには多少かけずりまわつてもいい。また編纂委員会といったものが出来るのだろうか、自分はその顔^{はな}を並べなくてもいい、それを肚^{はら}に入れておいてくれという私個人あての手紙だった。この最後の項は、橋本のほうに考えすぎからきた遠慮というか、遠慮しすぎからきた勘^{かん}がいがいというかがあるようにも思ったが、とにかく、その前後ちよつとあつた全集計画は、形をなさぬまま煙のように消えてしまつ

た。とても、小林多喜二全集の時のように、宮本百合子全集のように事は運ばなかつた。(徳永直選集の件)

そこで徳永選集、徳永全集編纂のことに戻つて、私はそれが能^{あた}うかぎり完全なものであることを望む。小説作品のことは言うまでもない。ほぼ二十年間の日記、手紙類はもちろん、彼の小品、雑文、時評、特に文学論文を洩れなく入れてもらいたいと思う。日記や手紙となれば、伏字とか削除とかが或る程度編者たち(あるいは肉親たち)に任せねばならない。徳永の政治生活、文学生活には、徳永に限らぬ多少の曲折があつた。それは教訓に充ちたものでもある。その全貌が示されるようにありたい。わけても文学論文、あるいは政治的文学論と言つてもよく文学的政論と言つてもいいものをも含めて、すべての派閥的利益をこえて主要なものが収録される必要がある。(徳永直選集の件)

作品その他まとまつた発表がないため、徳永の作品の研究、人間の研究、文学史上のいろんな関係の^{闡明}ということも妨げられてきている。単純に言つて、一つの大きな損失である。(徳永直全集、選集、また著作集を急ぐこと)

第一卷

要するに私は、徳永直の全集、選集、著作集ができるだけ実質的な形で一日も早く出る必要があり、その時期が熟してきていると思ひ、その実現を切望する。『小林多喜二全集』『宮本百合子全集』はすでに出ているが、徳永の出版がおくれているため、逆に小林、宮本の研究に停滞をきたしている向きもあるのではないかとも思っている。

(「徳永直全集 選集 また著作集を急ぐこと」)

先述したように、日本共産党系の新日本出版社や、郷土熊本の顕彰組織である徳永直の会の尽力によって、二巻本の選集こそ編まれたが、約五十年前の中野の訴えからそれほど状況は変わっていない。浦西先生が編纂していた全集は、私的な問題が絡むため経緯については公表できないが、ともかく破談に終わった。出版不況や著作権保護期間の延長など、いま全集を刊行するには乗り越えなければならぬ壁が多い。しかし、全集出版のためならば、私も橋本英吉と同じく「計画実現のためには多少かけずりまわつてもいい」とし、編集委員として「自分はそのへ顔を並べなくてもいい」と考えている。徳永直全集を刊行してもよいという気骨ある出版社は現れないだろうか。

浦西和彦編『徳永直全集』全十五巻 目次案

無産者の恋 / 馬 / あまり者 / 何処へ行く？ / 眼 / カットされない場景 / 能率委員会 / 麦の穂のような女 / プロマイドを捨てる / 大砲を磨く / 戦争雑記 / 握手(一幕一場) / 小資本家 / 欲しくない指輪 / 麦の芽 / 千二百円

第二巻

太陽のない街 / 失業都市東京 / 約束手形三千八百円也 / 赤色スポーツ / 失業避暑客風景 / 嵐を衝いて / 赤色スポーツ / 石炭の木 / 社会病 / 悪党になれぬ男

第三巻

豊年飢饉 / 「赤い恋」以上 / 銀行合併 / 活字は嘘をつく / 同志×村の遺作 / 戦列への道 / Yの艶書 / 残飯の味 / 頂点に立つ / 阿蘇山 / メーデーまで / 赤旗びらき / 他人 / 苦しい道 / 帝国主義デマ / 清吉は正しかったか？ / 失業自衛団 / 栄子の立場 / 「組長公選」 / 世話役 / ショール / 女工舎監督の日記 / 未組織工場 / ファツショ / スポーツ / めし / メーデーへ / 山一製糸工場 / 夫婦喧嘩 / 工場新聞 / 火は飛ぶ / 銃後 / 二人

の道

第四卷

文学サークル / 義雄の「お正月」 / 武士と資本家 /
 あおぞらへ投げる / 島原女 / 『職人気質』 / 母 /
 百姓花嫁 / 黎明期 / 冬枯れ / 葱 / スケッチ三
 題 / 彷徨える女の手紙 / お正月の客 / 梶川ツルの
 死 / 最低の組織 / 女の産地 / 逆流にたつ男 /
 訪ねて来た子供 / 弱虫 / 浅草一面 / 弱い強盗 /
 一つのタイプ / 彼岸 / 村の十日間 / 仏壇

第五卷

飛行機小僧 / 八年制 / 木槿のある村 / はたらく一
 家 / 心中し損ねた女 / 冬空 / 温泉行 / 技師阿
 波忠助 / T君の犯罪 / 陽子・道代・町子 / 父親の
 覚え書 / 最初の記憶 / ある解決 / 悪友 / 先遣
 隊 / 藁人形 / 他人の中 / 赤い風 / ハルピンの
 宿 / 先祖まつり / 長男 / ある患者の話

第六卷

ひとりだち / 読者たち / 九日の宿 / 東京の片隅
 / 世界の公園 / ある特派員 / 結婚記 / 夢の棲家
 / 見舞 / 海の上 / 宿の一夜 / 風 / 幼ない記

憶 / 二階借り / 隣組の畑 / 蜘蛛 / こんにゃ
 く売り / じゃがいもの記 / 出征する人 / 男の中で
 / 自然について / 罪ある子供 / 面白い町 / 三人
 / 小さい記録 / 冬 / 五人の子供たち

第七卷

光をかかぐる人々 / 光をかかぐる人々(後篇) / 妻よ
 ねむれ / 北朝鮮にいる友よ / がま / 敗戦前 /
 追憶

第八卷

夜あけの風 / 本田さん / 白い道 / 「たばこ」の話
 / あぶら照り / 研究会にきた男 / 青い風 / なが
 い唾 / 風のない日 / 地蔵 / 炎ゆらぐ / 背のた
 かい娘 / 川岸工場から / ある婚約者たち / 村にき
 た文工隊 / 日本人サトウ / 写真にそえて / さいづ
 ち頭 / 町のこえ / 街道筋

第九卷

よごれた空 / 慰安旅行 / 平助の百十八票 / みちづ
 れ / 基地周辺 / 富士と娘たち / 陽気なおじさん
 / かえってきた人々 / つゆぞらの下で / かたむいた
 屋根で / ふみつけられる草 / 飛行機ルポルタージュ

／ あかくなる顔 ／ 『旅行のナゲ』 ／ 雪 ／ 草いきれ
／ 静かなる山々(第一部)

第十卷

静かなる山々(第二部) ／ よごれた手拭 ／ 黒い輪
一つの歴史

第十一卷 文学編I

白状しとく ／ 「太陽のない街」について ／ 同志白須の
詩集「ストライキ宣言」を読む ／ 「太陽のない街」の上演
／ 「太陽のない街」は如何にして制作されたか ／ 「太陽の
ない街」と僕 ／ 未決監房の林房雄兄へ ／ 左翼文芸陣を
語る ／ プロ文学における感情の問題 ／ 文学的断想
／ プロレタリア小説の書き方 ／ 岩藤雪夫君へ ／ 力作なれ
ど傑作に非ず ／ 作家の生活大衆化 ／ 初夏の抱負
／ 吾々の文学運動の基礎を全国の工場へ！農村へ！ ／ 最後ま
で『処女作』 ／ 文学新聞の創刊 ／ 文学サアクルの性質
／ 小林多喜二の作品集「オルグ」を評す ／ 時評 ／ ナツ
プ七人集 ／ 小説は如何に書くべきか ／ 精確、単純明瞭
な文章を ／ 文学新聞は作家を産んだ ／ 「爆発」に寄せ
る ／ プロレタリア文学の一方方向 ／ ファツシズム文学の
本質 ／ 農本聯盟派のファツシヨ文学 ／ 文学宣伝隊の必
要 ／ 「大衆文学形式」の提唱を自己批判する ／ プロレ

タリア小説はいかに作られるべきか ／ 文芸時評 ／ 『プ
ロレタリア詩のために』—森山啓の力著— ／ 同志窪川鶴次
郎について ／ 創作活動の成果 ／ 逆浪に揉まれて
林の「青年」を中心に ／ プロレタリア文学の新たな飛躍
へ ／ 文芸時評 ／ この『行詰り』から奮いたとう！
『同盟の旗が折れた』—小林多喜二についての断片— ／ 伏
字問題その他 ／ 小説『転換時代』とプロレタリア作家、小
林 ／ プロレタリア新作家への期待 ／ 明治維新に関する
歴史小説 ／ プロレタリア作家の経済生活について ／ プ
ロレタリア文学への道 ／ 最近の感想 ／ 感ずること二三
／ 佐佐木俊郎について ／ 「作家」を志望する人々につい
て ／ 創作方法に於ける新段階 ／ 創作方法上の新転換
／ 大家の末路 ／ 「ナルプ」に対する希望 ／ 創作方法
に関する感想 ／ 「二つの提案」について ／ 坐って話す
／ リアリズムについて ／ 一九三四年への歩み ／ ゴル
キーに関する断片 ／ 新しき出発 ／ 島木健作君について
／ 「創作技術に関する問題」の提唱 ／ 弁証法的文章構成
の技術 ／ 春さむし ／ 逞ましい感性 ／ 「紋章」と「文
芸院」問題 ／ 芸術至上主義的傾向と闘へ ／ 林房雄の意
気 ／ ゴルキーに学ぶ ／ ナルプ的作品 ／ 林房雄にお
くる手紙 ／ 「太陽のない街」近況 ／ 纏まらぬこと二三
／ 転向作家とは何ぞや ／ プロ文学の昨今 ／ プロレタ
リア文壇の人々 ／ 「われらの成果」について ／ 島木健

作君への手紙 / 三十四年度に活躍したプロ派の新人たち
/ 地上に待つもの序文 / 文章と個性・社会性 / 窪川稲子の発展 / まずこんなことをやりたい / 島木健作氏の抗議に答う / 文学に関する最近の感想文 / 「雑誌文学」からの解放 / おぼえがき / 「単行本文学」の建設について / 創作におけるゴリキイの方法について / 渡辺寛について / 「主題の積極性」について / 僕はこんな心構えで書いてゆきたい / 文芸時評 / 文芸時評 | 明るさを求めて / ゴリキイに学べ / 長篇は作家の財産 / 人生武者修行者 / 「炭坑」の表現と構成について / 自然について / 所謂「私小説」形式弁護のために / 文芸統制について / 世界の文学の先駆

第十二卷 文学論II

転換期のプロレタリア文学 / 生産場面をいかに描くか / 主題と表現 / 文壇の時事問題を考える / リアリズムへの道に大きな暗示 / 労働者作家の抬頭 / 「電鍵」について / 純文学と大衆文学の区別 / 若き勤労者作家へ / 詩人はもつと病気をうたえ / スケッチと報告文学について / 「蟹工船」の非実感性 / 島木の作風について / スケッチと報告文学の提唱 / 文芸時評 / 「辛抱づよき者へ」詩集・松田解子著 / 蓋をされた文壇 / 諷刺文学の問題 / 「職場スケッチ」についての感想 / ぼく

の経験 / 工場小説のねらいどころ / 生き延びた道 / ソビエットロシヤの「文学教程」 / 激しい波との闘い / 満腔の良心 / 長篇小説運動の苦難 / 文学賞を与えるとすれば / 苗代ごろの感想 / リアリズム問答 / 文芸時評 / 文学形式の貧困 / 本質的不快さは別 / 日本プロレタリア文学の現状 / ゴリキイの作品が持つ労働者性 / 文章と個性・社会性 / 小説「馬鹿野郎」批評について / 不満 / 「炭坑」その他 / プロレタリア文学の将来 / ルポルタージュ / 報告文学とは何か / 『社会記事』と『学芸記事』と / 日本文学の危機 / 新人作品の特徴 / 「太陽のない街」回想 / 「路傍の石」について / 主題の新しさ展開 / 歴史本質への疑問 / 筋の立て方進め方 / 文学大衆化論に就ての覚え書 / 文学者の立場 / 文学的自叙伝 / 文章に表現出来ぬもの / 自己小説・風俗小説・社会小説の交流 / 「炭坑」と「東京市電」 / 最近の児童文学 / 報告文学と記録文学 / 来るべき文学 / 冬を越す文学 / ルポルタージュ文学を！ / 自作案内 / 作家の収入に立脚して / 純文学と大衆文学の境界 / 「報告文学」に就て / 西鶴物の読後感 / 農民文学への希望 / 小説報国 / 『子供ととも』——松田解子随筆集—— / 現代世相小説 / 大きな転換期 / ゴリキイとアンドレーフの喧嘩 / 昭和十三年の文芸界 / 不惑の歳 / 私の手帖 / 文芸時評 / 「く

れなぬ」について / 映画の健康性 / 満州で文学をする人々へ / 文芸時評 故岡本氏の文章 農民文学の恥 / 創作日記から / 大陸文学について / 徳田秋声著「光を追うて」 / 『勲章』について / 文学の健康性 / 五月の三作品「手」「筋」は「通俗」であるか / 作家批評の基準について / 「筋」は「通俗」であるか / 小説という言葉 / 長篇と論理性 / 九州出身の作家 / 強靱無比な感性 / 大江賢次著『満州国前夜』 / 文学の周囲 / 努力と才能 / 昭和十四年の文芸界 / 「小説修業」談義 / 混乱の一年 / 新人と旧人の間 / 「大陸文学」と「満州文学」のタイトルについて / 本庄陸男著「石狩は懐く」 / 「嫌な奴の登場」について / 「生活を考へる」について / 文学修行ということ / 小説における自我の衰弱 / 作品と作家の間 / 小説と生活の間 / 通俗との岐れめ / 解説(葉山嘉樹著『濁流』新潮社) / 瘦せる小説 / 生産文学について / 窪川稲子著『素足の娘』 / 文芸時評 / 中野重治著『汽車の鐘焚き』 / 医者と小説家 / 小説をかく愉しさ / 「見る」ことと「考える」ことと / 「ゲーテとの対話抄」から / 新体制と文学 / アジア諸民族の文学を知りたい / 芸術における「贅沢」の意味 / 私の短篇集 / 傑作いでよ / 伊藤永之介著『離村記』 / 平川虎臣著『愛情浪漫』 / 特徴を生かすこと / 勤労と文学 / 文学的な育児観 / 今年は何んな題材を / 一

月の小説 / トルストイから学ぶこと / グウテンベルグその他 / 文学常識の向上 / 勤労者の文学 / 上林暁とその作品 / 小説の今日的意味 / ある時の尾崎士郎 / 読み落した古典作品 / 文芸時評 / 「ロダンの芸術観」 / 上林暁「悲歌」 / 小説へはいる道 / 伝記小説について / 新聞小説について / テーマとモチーフ / 「背景」と「釣狂記」 / 歴史小説のモチーフ / 小説の科学的テーマ / 歌・小説への架橋 / 朗読に堪えられる小説 / 二葉亭について / 職業と芸術と / 長谷川君のこと / 少国民文学への反省 / 小説勉強 / 無名作家の作品 / 志賀作品の印象

第十三巻 文学論Ⅲ

文学に於ける民主主義の問題 / 文学集団と若い作家 / 「太陽のない街」の復刊 / 文学的足場 / 中野重治のこと / 「太陽のない街」について / 「日本共産党」と文学 / 報告文学について / ゴリキー作品が与えるもの / 回覧雑誌をすすめる / 労働者と文学 / 「はたらく人民」と「労働者」とその文学について / 「太陽のない街」をみて / 葉山嘉樹の死 / 民主主義文学運動について / 私はどういう風にして「太陽のない街」を書いたのか / 解説「紹介的に」(中野重治著『鉄の話』新興出版社) / 職場に作家を育てよ / 新描写論 / ルポルタージュ

論 / 「文学修行」その他 / 報告文学に就て / ルポ
 ルタージュについて / 何を描かねばならぬか / 新段階
 の勤労者文学 / ルポルタージュをさかんにしたい / 解
 説(橋本英吉著「楯と赤旗」新興出版社) / 花ひらく / 橋
 本英吉「富士山頂」 / 文化問題で大切なこと / なかの・
 しげはる論 / ルポルタージュをさかんにしよう / 「は
 たらく人民」と「労働者」とその文学について / 文学サー
 クルの経営について / 小説を書いた私の経験 / 鷗外に
 ついての覚え書 / 小田切秀雄の感覚 / 日本文学の新し
 い力 / 「おれは文学者だ」 / 私の文学故郷 / 勤労者
 文学の現状と民主主義文学における位置について / 勤労者
 文学をもっと前におしだすこと / 「多喜二賞」と文学会員
 / レアリズムをつくるもの / 葉山嘉樹の文章 / 作品
 批評を展開せよ / 「勤労者文学」の創刊について / ひ
 ろがる文学世界 / 勤労者文学への攻撃に答う / 生活と
 文学のかみあいの弱さ / 「破戒」のもつ意味 / ついて
 まわる批評 / 現実からの遁走 / 何を、どうかかくかとい
 う問題 / 多喜二のレールは直線だった / 勤労者文学の
 前進 / 葉山嘉樹の記憶 / 志賀直哉に望むもの / あ
 たらしい小説勉強 / 中村武志君に答える / 読者を忘れ
 た作家たち / 読者の意見を募る / 丹羽君へ / 小説
 のつくり方 / あるときの小林多喜二 / 「太陽のない街」
 のころ / 佐多稲子「白と紫」 / のろのろぐづぐづと
 / 「太陽のない街」の歴史 / われわれは数十歩前進しよ
 う / 文学通信 / 新日本文学会の方針についての共同提
 案 / 提案にたいする諸氏の意見についての報告 / 上海
 文化芸術工作者総会の行動綱領十カ条をよんで / 「あなた
 はネ労働者作家にあまいわよ」 / 「太陽のない街」前後の労
 働者の運動と意識 / 小林多喜二と宮本百合子 / 多喜二
 のばあい / 山脈や海原を越えて / 人間をかくことに
 ついて / 私の処女作と自信作 / 「なぜ書けぬか？」の
 問題 / 「生産面をえがく」について / 黒島伝治「渦巻
 ける鳥の群」 / 愛国の英雄をえがけ / 葉山嘉樹の位置
 / 「阿部一族」その他 / 多喜二と「蟹工船」とその映画
 化 / 労働者農民の作品が多い / 追求に厳しき欠く(金
 達寿著『玄界灘』) / 作品「鍵」について / 再びペンをと
 るにあたって / 映画「太陽のない街」のこと / 文学の
 統一戦線と労働者農民の文学の不振について / 映画「太陽
 のない街」は日本国民の誇り / 「二銭銅貨」について /
 「太陽のない街」映画化について / 生活描写の真実性 /
 読者の皆さまへ / ソヴェト作家大会に出席して / そわ
 そわしながら / ソヴェトの文学サークル / 働らくもの
 の文学をそだてるソ同盟と中国 / 中村武羅夫と檜崎勤
 渦巻ける鳥の群 / 中国文学と日本文学 / 日本文学の故
 郷 / 中国文壇の人々 / 全ソ作家第二回大会に出席して
 の報告 / 中国と朝鮮の作品 / 老舎紀純著「文章の書き

方」／ 労働者が作家になるには／ 描くことと書かないこと／ 人の心を温める文学／ 壺井さんへの応酬ではない／ 壺井栄へ／ 労働者農民的作品が少ないことの原因を示せ／ 勤労読者と勤労作品と／ 宮本百合子批判の問題／ 「静かなる山々」について

第十四卷 エッセイ I

同志談林／ 婦人部と倶楽部／ 一人一役／ H P の新組織に就て／ 産業別合同と全国総連合／ 動揺し始めたブル政党／ 博文館共済会規約改正案に就て／ 実際を如何に運動すべきか／ 飯飯線漫談(ハンガリー)／ 「明治維新史」附「絶対主義論」／ メーデーの歌／ 名づけ親／ 「眼」の問題／ 失業自衛団／ 新恋愛は工場に芽生える／ 「女を感じる」／ ブルジョワ・エロ・グロについて／ ペンネーム・本名の由来／ 今日の出来事／ 三羽鳥最後の一人『渡政』／ お父ちゃんを返せ！／ 山の階級性／ 石川から／ 鞭をあてよ／ 「盆踊り」を踊る／ 日本アルプスを超えて／ 外へ出ろ！／ 大工場地帯を行く／ 近代学生気質／ 鶴見大工場地帯／ 山宣サンの記念碑の畔で／ 農村風景／ 海軍大将の理想から印刷工へ／ 疑う／ 失業長屋を吹く風／ 私の一九三二年／ 工場街の春の日／ 戦争劇と東北凶作救済の問題に対する彼等と我々／ 野球／ 佐野学氏／ 組合製糸を見て

七月二日を目にかけて／ この暴虐極まる求刑振りを見よ／ オリジナルとは何か／ 工場で働きたい／ 成長する彼女たち／ 歴史的に果たした「輻重隊の役割」／ あげ潮／ 年頭隨筆に代えて／ われらの文化風土記／ 阿蘇の高原／ 苳牧十二夫君について／ 故郷行／ 春さきの感想／ 「金銭のねうち」について／ ソヴェート芸術映画／ しじみとり／ 工場地帯を歩く／ 「第三新生丸」後日譚について／ 初春のことば／ ストリイ的に見た映画感／ 東北凶作地巡回記／ 「奇傑パンチョ」を観る／ 独楽を如何に廻すか？／ 凶作地の春を憶う／ 飛行機の平和性／ 西澤音楽の放送／ あまりに偏頗相場師／ スポーツについて／ 一抹の明るさを感じる／ 春を迎える為／ 東北の旅から／ ある神経衰弱者の日記／ 掛声よりも内容／ 家を建てた／ 映画「人生劇場」を観る／ 半蔵の姿を／ 花を見た春／ 農家での十日間／ 阿蘇の山肌／ 私達はいつ愛し得るか？／ 作家の見た東北農村／ 煤煙の京阪地帯／ 阿蘇山の思い出／ カブト町風景／ 東京大相撲春場所ルポルタージュ／ 僕の黒板／ 「出来た」いや「作られた」／ F・ツイース氏著伊東鉄太郎・半田弘平氏訳『日露戦争』／ 作次の慰問品／ 石村一家／ 地道になった／ 日記の弁／ 梅の木／ モンペをはいた娘／ 平凡と非凡／ 右往左往の記／ 古本の新しさ／ 一峯に達すれば／ 疲

れている／ 球磨川の夏／ おぼこ様／ 地方性と特殊性
 性／ 夏・土曜日の宵のさまざま／ 近頃の読書／ 釣れない話／ 日記抄／ たより／ ハルピンの二泊／ 満州移民地を巡りて／ 若き世代に望む／ 葉書隨筆／ 兄弟子を真似る／ 鼻／ 梅と桜／ 二つの魅力／ 野良着その他／ ニュース映画雑感／ 近所界限／ 私の手帖／ 海を渡る人々／ 観客の立場から／ 移民と大陸と／ あれやこれや／ 海を渡る人々／ 少年歳時記を読む／ 佳木斯ジヤムスの町／ 土に萌える／ 笑い／ 野球の綴り方／ 「光をつくる人々」／ 「二袋の駄菓子」／ 「浅瀬」／ 「ちははの記」／ 無題／ 旅への思慕／ 秋のつれづれ／ アメリカ我観／ たかく、そしてたかく／ ある日の私／ 野菜／ 恒常的な一面について／ 僕の落書帳／ 勉強／ 六日方伝の印象／ 「無智」と「金銭」について／ 畑の中で／ はたらく少年／ ぼくの畑／ 春の風邪／ 馬とはたらく子／ 出ぐせ／ 「日本文化史展」を観る／ 記憶に残るもの／ ぶたれた子／ 原作者と翻訳者／ 夏の感想／ カルティニー著「暗黒を越えて」／ 「子供の一日」その他／ 弟のこと／ 生活の責任／ 性格の不均衡／ 特急さくら／ 勤労者娯楽の今昔／ 感想録／ 工場娯楽の今昔／ 他人へ通ずる道／ 映画と筋／ 野良猫騒動／ 謙虚な推進力／ 気づいたこと／ 明治の建設者たち／ 勤労女性

の読書／ 勤労文化について／ 食い物について／ 若い者はハイカラだ／ 三谷幸吉氏逝く／ 活字の話／ 労働者の言葉／ 漢字制限について／ 新嘉坡陥落を祝して／ 案山子の威力／ 忠犬フジ子と弟のこと／ 漢字制限について／ 人間は働かねばならない働くには辛抱が必
 要だ／ 五つの話／ 私感／ 活字の歴史／ 三羽の鶏／ 本木昌造と日本の活字／ 思いつくこと／ 勤労姿態の美について／ 印刷術の発展と由来／ 鉛活字の最初／ 作者の言葉／ 国民的発声／ 青少年期と読書／ 馬糞その他

第十五卷 エッセイII

未発表日記／ 精神的な荒廃／ 東北からのレポート／ 汽車の中の座談会／ 停戦発表の日／ 新制の再建／ 嘉平の活字／ 飛躍を阻むもの／ 天皇制の論議の仕方／ 青年男女に告ぐ／ 上海へ／ 不孝な児童たち／ 波がしらの底は／ 議論せよ／ スケッチ・二人の老紳士／ とどろく歌ごえ／ 新生活運動について／ 漢字の政治性／ 隣組と婦人の勉強／ 朝鮮について／ 疎開先から／ 五十万の足音／ 飢えとたたかう人々／ 新しき夫婦／ 応援演説／ 「東京の一日」を世界におくる／ ほこりの中から／ わが師を語る／ 諸君は女房を何とよぶか／ 「どん底」をみる／ 一つの時期

ある話 / 未亡人に新しい日 / きつねにだまされる話
/ 不便はあるが慣れていこう / 生活再建と結婚問題 /
「落し文」と「回覧誌」 / 家と子供の問題 / 人民の広場
/ 新しい朝鮮に期待する / 失われつつある熱情 / 戦
争が負けたとき泣いたということ / 感想 / 複雑な展
望 / 身につく読書 / 「戦争未亡人」と「子供」 / 顔
を上げよう / 勤労青年の性格 / 小さなことを / 新
しい鋒ぼう / 「文化日本」の可能性 / 文部大臣賞その
他 / すこしのんきに / 推せんことは / 浅草の
絵看板 / 「ヨーロッパ派」について / 外国語について
/ 平和の擁護とユネスコ憲章 / 女の表現 / 一つの提
案 / 「民衆不信」と「革命性」について / 「日常性」そ
の他 / 新しい「公私」の誕生 / 一つの報告 / 枕木
とレール / ランプ / 平和会議その他 / 本を読ま
れぬ人々 / 二つのジャーナリズム / こんなことが起っ
ている / 投稿諸氏への報告 / 争議のある村風景 /
シルクハットをかぶった暴力 / 惜しくない話 / ある日
のスクラップ / つむじ風のなかで / 書物と読者の関
係 / 質問します / フージュロンの絵 / 世界的な出
来事 / 行水 / 人間の悪しき心 / 徳永直からヒルス
カへ / その頃の日記 / 二つの大衆性 / スケッチ・
ブック / ソヴィエト映画と日本人大衆 / 私の自己批判
/ 「原動力」と「甦える大地」 / ロシヤ革命に一命をささ

げた日本人 / 人のよい夫婦 / 濃霧の中で悲鳴もきこえ
ず / 母なれば女なれば / 同志佐藤の追悼会 / 大衆
は雑草ではない「日本人労働者」によせて / 落伍の記 /
私は期待する / ロシヤ革命に輝いた日本人労働者の赤い星
/ いま広場へ出てきた / 今日の勤労者とむかしの勤労者
/ 小さくない問題 / サインをする話 / 選挙にどう望
む / おかえりなさい皆さん! / 子供は抵抗できる /
「朝鮮戦争はやめろ」 / 朝鮮民族のてがらをたたえよう
/ 「地底の人々について」 / 鈴木裁判長よあなたの任務は重
い! / 文学者の発言 / 松川事件と文学者 / 外から
内へ、内から外へ / よくぞつくった / 沈め、沈め、大
衆がもつ深さまで沈め / すぐれた農民気質の典型 / 内
田巖の思い出 / ジャン・ラフィットへの返信 / あな
たの心にぎざす暗い影はなにか? / 「大衆にまなぶ」こと
/ リードしつつあるもの / ビラ・ポスターなどの文章に
ついて / 労働はいかに人間を鍛えるか / ソヴィエト同
盟をたずねて / はたらく人へのあふるる愛情 / 幸福な
ソ同盟の労働者 / レニングラード見物記 / 農民へのみ
ごとな理解 / 肩をよせ、のどをふくらませて / 平凡
なことがらの中に / 五枚の皿 / 「場ちがい」な私 /
飛行機とシベリア娘 / 医者には病気を治すこと / 「機械
のなかの青春」を読む / 北区の人 / 短所だけをつつく
な / 広東の女役者 / みんな卅代になったばかり /

大震災前後 / 「私も書きます」について / 総評臨時大
会傍聴記 / 思い出す人々 / 悪い映画から眼を逸らすな
/ 怠けもののおどろき / こんなことがあつてよいのか？
/ 新日本文学通信 No. 4 / 若い人びとはどうか頑ばって
もつと幸せな生活を送るように / 絶筆

* 一部で作品の重複も見られるが、原稿を尊重してそのまま記
載した。ただし、作品標題の誤記については可能な限り修正
を施した。また、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣
いに改めた。